帰らざる日々

誰も知らないALICE

アリス

帰らざる日々

アリス

角川文庫 4669

昭和五十五年八月二十日　初版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話東京二六五—七一一一(大代表)
〒一〇二　振替東京⑧一九五二〇八
印刷所——旭印刷　製本所——多摩文庫
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0195-147251-0946(0)

日本音楽著作権協会（出）許諾番号 8008685

帰らざる日々

誰も知らないALICE

アリス

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

読者へ——

なぜ、われわれは《アリス》
なのだろう。
なぜ、われわれは《アリス》
でなければならないのだろう。
まずはじめに出会いがあった。
ともに流した汗があった。
ともに流した涙があった。
熱い思いをいだきあい、
明日を追い求めて突き進む

日々があった。
　いくたびか四季が流れ、
そして今、われわれの、
《アリス》がある。

《アリス》のエッセンスを、
この本を読んでくれる皆さんと、
わかちあいたいと思うのです。
ハンド・イン・ハンド。

目次

読者へ――　四

Ⅰ章　誕　生　二

どこへ行っても　ステージが満員になるまでやろうな
へ……ロバのパン屋だ　チンカラリン……
〝ブタ〟これがぼくのあだ名だったんです
これや　今の時代　これじゃないとモテん
反戦を歌うのはいい　しかし歌うだけじゃ何もできないんだ

Ⅱ章　発端への旅　吾

アメリカ行って　日本の歌をきかせたるのや
堀内と矢沢がぼくの視野に入ってきた

Ⅲ章　アリスの春　七

チンペイさんとの出会いが　ぼくにとって大きな岐路だった
ぼくには好きなことが一つだけあった　それが歌だった
チャンピオンになる可能性がわずかでもあるならリングにのぼるべきだ

Ⅳ章　翌檜（あすなろ）　九

三人揃った〈アリス〉の初ステージは　一九七二年五月五日
あいつは酒とクスリばっかりやってるけど　やらないときはすごいって言われることを夢想していた
三人の男がそれぞれの夢を思いきりぶつけあっていた

Ⅴ章　走る！　二七

しゃあないやんか　オレはおまえに賭けたんや　おまえが死ぬんやったら　みなおしまいや

お客が少なければ少ないほどカッカしてくるんだ
稼いでも稼いでもお金はぼくらの前を素通りしていく

Ⅵ章　夜明け　一六一

七五年秋の共立講堂のステージは忘れられない
一度立ち止まってしまったらもう走れなくなる
二人だけの〈アリス〉に耳を傾けながら　ぼくはうれし涙が
とまらなかった

Ⅶ章　硝子(ガラス)のトライアングル　一八五

これだ!!　この曲だ!!　ぼくの頭に『冬の稲妻』が浮かんだ
〝オフコース〟から誘われて真剣に考えた　結局　ぼくは〈アリス〉をやめなかった

Ⅷ章　そして《アリス》は……　二〇七

明日よりも　一年後の　三年後の〈アリス〉のことの方が大

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

切なんじゃないか
ぼくらは走ってばかりいた　なにを追い求めていたんでしょうか
《アリス》の秋に　また会いにきて下さい
再び　読者へ——　二二〇
あとがき　二二二

本文写真／内藤利朗・構成／山際淳司

I章 誕生

Talked by S. Tanimura

どこへ行っても、ステージが満員になるまでやろうな

まず、ぼくから語りはじめようか。

名前は、谷村新司。本名です。

通称、チンペイ。高校時代からなんとなく使われているニックネーム。どういういわれがあったのか、もうおぼえていないくらいですから、たいした話じゃないのかもしれない。チンペイ。この名前にも、すでに十数年の歴史ができてしまっている。

さて、いかにして我々の〈アリス〉が誕生したか――、思えば、遠くて長い道のりがある。〈アリス〉ができる以前にも、様々なドラマがあります。〈アリス〉の谷村新司ではない、人間・谷村新司として生きてきた軌跡がある。ぼくだけじゃない。ベーヤン（堀内孝雄）にも、キンちゃん（矢沢透）にもあるのです……。

我々が〈アリス〉を結成したのは一九七一年の十二月二十五日、クリスマスの晩だったと思う。大阪・ミナミにあるホテルの一室を借り切って、そこが我々の事務所でした。ホテルの名前を

聞いて驚かないでほしいわけです。帝国ホテル――それが正式名称。つまり、ぼくらは「帝国ホテル」の一室を借り切ってオフィスを開いたのです。

それ以上の説明をつけ加えなければ、エラく格好のいい話なんですね、実は。実際のところは〝御休憩〟もあるビジネスホテルという感じ。東京の、あの帝国ホテルとは関係ないのんです。部屋代がアホみたいに安いそのホテルが、ぼくらの仲間のオフィスであり、同時に宿泊所でした。

その年の十二月二十五日。よくおぼえています。

まだ夕暮れどきだというのに、空はもう、夜。街にはクリスマスと歳末大売出しの活気があって……。

ぼくはすっかり陽の落ちた心斎橋筋を帝国ホテルに向かって走るように歩いていた。左手にはギターを持っていたと思うんです。当時のことだから。街角にはイヴの晩に売れ残ったクリスマス・ケーキがまだ積まれていたりして。ビング・クロスビーの『ホワイト・クリスマス』なんかも流れていたかもしれない。ネオンが十二月の冷気のなかでキラリとまたたいています。家族連れが、一家団欒の茶の間の雰囲気そのままで、街を歩いています。

でも、ぼくはその雑踏をかきわけて歩くのに必死でした。息せき切っていた。その日から〈アリス〉が走り出そうとしている……。冬の黄昏どき。吹きつける風は、ぼくにはちっとも冷たく

なかった。

帝国ホテルの階段をあがって、奥まった一角にある事務所のドアを、ぼくは開ける。そこには《アリス》が翔びたつための翼があるはずでした。ぼくらは本気になって、空に舞いあがろうと思っていた。ぼくらの青春のエネルギーに翼をつけて全力で走れば、その速度でやがて人も空を翔べるのだと、信じていたのです。

ドアの向こうには、ベーヤンがいた。

キンちゃん、矢沢透は、そのときまだ帝国ホテルにはいません。一緒に《アリス》をやろうと決めていたけれど、キンちゃんは東京から大阪に移ってこなければならなかった。彼は東京の空の下で、クリスマスの晩をあわただしく過ごしているはずでした。

クリスマスの晩の出発――。しかし、パーティーなんてなかった。

ぼくらは近くの「浪花そば」へ行き、うどんを食べた。このお店にはよく通っていました。

「浪花そば」のおじちゃん、おばちゃんには子供がいなかった。そのせいか、ぼくらが行くと、いつもよくしてくれるのでした。

「新しいグループ作って、やるねんて？」

「そう。名前は《アリス》。いいやろ」

「おめでとう。ほならうどんに揚げ玉入れたる。サービスや」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo